

◆八木健 選

～久松久子の句集『夕焼雲』を読む～

『夕焼雲』は文庫本サイズで一四五頁。前半は俳句で後半は随筆となっている。いずれも二〇一八年～二〇二四年に滑稽俳句協会の会報に掲載されたものである。昨年の十一月に九十二歳の長寿を祝ってお孫さんが製本してくださった記念の一冊である。

俳句における滑稽とは何かがよく分かる句集である。滑稽とは、という視点で十五句を選定し、感想を書かせていただいた。

大根でも器量の良きはすぐ売れて

「でも」が可笑しさの勘所である。人間も外見で判断されてしまうのは日常である。物も野菜も見目の良いものから売れるという現実が可笑しくもあり、哀しくもある。大根の良き器量とは、ずん胴で元気そうなものをいう。

百キロの子に風邪薬倍飲ます

市販薬では十五歳以上を大人とし、年齢層をいくつかに分けて用量が定められている。病院が処方する薬は、体格や体重、病状などが考慮され、体重五十～六十キログラムの人を標準として用量が決められている。ただし、体重と体の機能は正比例するわけではないから要注意である。それを承知で脳裏に浮かんだことを妙案として書いたところが滑稽。

夫婦喧嘩難攻不落冬籠

どちらも口を閉ざしてかたくなな態度を崩さない。互いに譲らないから難攻不落というわけだ。漢字表記によって家庭の膠着した硬い状況が伝わる。

白鳥のカメラ目線のポーズかな

白鳥の方は、カメラなど全く意識していないのだが、美しい姿を見ていてふと感じたのである。一瞬、作者と白鳥が一体になったから詠めた句である。

銀行にきてサングラス外しけり

サングラスをしていると、銀行強盗や不審者と間違われる虞がある。実際に

はそんなことは杞憂というものだが、生真面目さゆえの心理が可笑しい。

半人前の子に意見され敬老日

「老いては負うた子に教えられ」である。高齢になると我が子に指導されるようになる。親から見ればまだまだ一人前とは言えないが、有り難く拝聴する。腹立たしさよりも頼もしさを感じて、指導されることへの嬉しさがある。

咳の人以外全員息止めて

コロナ禍以降、他人の咳やくしゃみに過敏になってしまった。特にエレベーターの中ではこんな風景が見られるのではないか。誰もが経験しているはずである。

大納言の位を誇る小豆蒔く

小豆の中でも、大きくて煮た時に皮が破れにくい品種は「大納言」と呼ばれる。実が割れないことを切腹の習慣がない公卿の官位にもじったものであるが、小豆の擬人化が楽しい。

ライオンも虎も怖くて毛皮着る

獣が怖くて好きではないくせに、毛皮は着るという矛盾。人間の身勝手さ、都合のよい自分を笑うのである。

節電にビタミンDの日向ぼこ

日向ぼこをすると二つ節約ができる。一つは暖房の電気代で、もう一つはビタミンDのサプリメント代である。無料で支給される太陽光に感謝である。

シャッターを切れば不動の滝となる

その通り。滝の動きは、写真に撮れば静止面になる。一般的には、「不動の滝」とは不動明王像を安置している滝をいうが、写真の中では動かない滝になるという発見が句になった。

尖がった靴で躓く新社員

靴だけではない。とんがっているのは、新社員の気持ちや言葉遣いや態度もそうだ。懸命に突っ張っていて新社員らしくて初々しいのだが、上手く仕事は進まないのである。

へそくりの見つからぬまま掃納め

隠しておいたはずのへそくりが見当たらない。確かこの辺にしまったはずなのにと、あきらめきれぬまま新年を迎えることに。何とも人間らしさがあるといい。

軍歌しか知らねえと立つ敬老会

みんなで歌謡曲や童謡を歌おうとした時、一人の男性が立ち上がってつぶやいた。頑固爺であるが、思い出の中に軍歌しかないという哀しみがにじむ。

独り身とけろりと日傘差す老婆

自身のことを詠んだ一句。「けろり」に久松さんの心の自由と向日性が象徴されている。

◆久松久子

昭和八年、茨城県出身。昭和六十年に「馬酔木」「燕巢」に入会。平成九年に「百鳥」、平成二十一年に「滑稽俳句協会」に入会。句集に『青葙』『松の尾』『続 松の尾』『笑って五七五』がある。